

氏名(本籍)	アントニオ・ルイズ・ティノコ (スペイン)				
学位の種類	文学博士				
学位記番号	博甲第 598 号				
学位授与年月日	昭和 63 年 11 月 30 日				
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当				
審査研究科	文芸・言語研究科				
学位論文題目	日本語の「限定」と「 $\phi$ 」の限定辞の用法				
主査	筑波大学教授	Ph. D.	草 薙	裕	
副査	筑波大学教授	文学博士	北 原	保 雄	
副査	筑波大学教授	Ph. D.	中 右	実	
副査	筑波大学教授		松 本	克 己	

### 論 文 の 要 旨

本論文は、名詞句が具体的に何を指しているかを示す言語現象である「限定」のメカニズムが、冠詞のない日本語においてどのようにおこなわれているか、また「限定」における「定」、「不定」がどのような仕組みになっているかを解明することを目的としている。そして、日本語の名詞で形式的に限定されていないものに「 $\phi$ 」という無形の限定辞を仮定し、限定の操作が他の語との相互限定によるものであることを解明し、さらに「定」、「不定」の決定のメカニズムを説明するモデルを提案する。

まず序章では、われわれ人間が言語に関わる時に、言語の単位になっている記号を形成する能力と記号に具体的な意味の範囲を決めるメカニズムがあることを指摘する。「概念形成」で物事を知覚、分類し、その抽象化したものを名付けることで記号化し、その記号体系を使用するときに「限定」という具体化過程により意味の範囲を定めると考える。そして、その限定というメカニズムがもの名を示すような名詞のみならず動詞などにも適用されることを指摘した後、今までの言語学における「限定」の研究が特に欧米語の冠詞の用法を中心とするものになっていることを指摘している。

第一章では、「限定」についてのいくつかの理論の検討を行っている。

1.1ではポール・ロワイヤル文法における限定の概念を、1.2では J. Krámský の「定」、「不定」の概念を論じている。1.3では C. Bally の限定の理論における、話し手の現実化表象との同定である「現示」という概念を論じ、1.4では E. Coseriu がそのための「現示辞」がない言語では場面、領域、文脈、談話などの「周辺領域」によって行われるとしていることを指摘する。1.5、1.6、1.7ではそ

れぞれ P. Christopherson, O. Jespersen, S. Yotsukura の名詞の分類を検討している。

1.8では J. Hawkins の、英語の冠詞の用法の理論づけに用いられている「連合照応」を検討している。1.9では日本語の「ハ」と「ガ」を限定の観点から論じている。

第2章では、まず、2で日本語において、ヨーロッパ語の冠詞などに見られるような限定辞に相当する形式がないが、話し手と聞き手の共通知識などから、限定の要素が存在することから無形の限定辞 $\phi$ を仮定することを提案する。そして、限定する要素とされる名詞の結び付きを Hawkins の連合照応の概念を発展させた「ひっかかり」という概念で分析することを提案する。たとえば、

- 1) エリサがピアノを弾いた。
- 2) エリサがピアノを持ち上げた。
- 3) エリサがピアノを売った。

における「ピアノ」がそれぞれ、楽器、重い物、商品だと判断できるのは、それぞれの文の動詞が「ピアノ」という名詞を限定しているからだとし、限定する要素が名詞に留まらず動詞や形容詞なども含めた「ひっかかり」を提案する。

つぎに、2.1で限定における定、(不定)の概念を次のような2つの基準によって定義する。

- 1) その名詞句により理解された集合に属する実存物の1つ1つの要素が、話し手にとっても、そして聞き手にとっても完全に同一の要素であるなら、その名詞句は「定」となる(厳密な基準)。
- 2) その名詞句により意味された「集合」の要素が個別に決まっていなくても、また実際に存在していなくても、その「集合」に属するための条件が話し手と聞き手の両方にとって同じであるならば、その名詞句は「定」となる(ゆるい基準)。

この2つの基準を設けることで、実存物があるものと、それが無い総称的なものを処理できることをいろいろの例を用いて論じている。

2.2では同義、反義、連想などの語の間の関係が限定のメカニズムとしてはほとんど有効に働いていないことを示している。そこで、2.3で限定のメカニズムの解明のためには記憶の構造を取り入れなければならないとし、いくつかの心理学的モデルの検討の末、R. Schank の記憶構成パケットの理論にたどりつく。そして、このモデルを限定の解明に利用するために、記憶のメカニズムや話題の筋書などに加えて名詞の種類、単複数、接頭辞、名詞と動詞の意味関係、照応などを検討している。

最後に限定における定、不定の決定のメカニズムのモデルを提案し、例文を用いそれがどのように働くかを示している。

## 審 査 の 要 旨

限定の問題はヨーロッパなどの言語における冠詞の使用法というような形で研究されてきたが、言語表現とそれが指し示す指示物の範囲という、きわめて、抽象的であると同時に、語用論のレベルにもかかわる難問である。本研究は、その難問を、明確な定義を用いて明らかにしようとしたば

かりでなく、日本語という、その限定のメカニズムを主に表現する冠詞の類の語を持たぬ言語における限定を説明しようとした意欲作である。

限定における定と不定の問題が指示物の範囲の限定である限り、実存物の指示と、総称などのような実存物の特定ができないもの、さらに日常表現における曖昧な言い方などの区別は大きな問題であるが、それを二種の基準を立てることで解決している。

また、この限定の語用論的な側面について、記憶のモデルを適用して、客観的な処理の方法を提案しているところも評価できよう。

ただ、理論的な議論やモデル論の展開だけでなく、実際の言語現象との関連をもう少し広範囲にかつ詳しく検討していれば、もっと説得力が出ただろうと惜まれる。また、前半の理論の検討の中には、不必要と思われるものもあるとの指摘があった。

しかし、本研究は、難問に挑戦し、限定のメカニズムのモデルの提案までにまで至っており、しかも、そのモデルが将来、機械翻訳において日本語名詞の英訳の際の冠詞の決定などの見通しを示したことなど、学位論文として水準に達していると判断できる。

昭和63年9月5日、文芸・言語研究科において、審査委員全員出席のもとに筆者の論文について説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

以上の論文審査および最終試験結果に基づき、アントニオ・ルイズ・ティコノ氏は文学博士の学位を受ける資格があるものと認める。